

「新しい女」と女性解放

▶1 女性と女子教育 p.540, ▶2 「大衆」と「社会の発見」 p.580, ▶3 女性と宗教 p.38

『日本国語大辞典』（小学館、1972～76）は「新しい女」をこう定義している。「新しい思想を持った女。男女不平等を認める因襲を打破し、婦人の新しい地位を獲得しようと自覚した婦人。また、それを装ったうわついた女性に対するさげすんだ呼び方。明治44年（1911）青鞥社の婦人解放運動を起こした当時流行した語」。これを読むと、あたかもはじめに「自覚した」正統なる「新しい女」が存在していたところへ、「それを装った」偽物が登場してさげすまれたという歴史的先後があったかのようであるが、それは事実ではない。「新しい女」という日本語は、むしろはじめに「さげすんだ呼び方」として人の口の上り、その後「自覚した」本物を指すようになったのである。

●「新しい女」とさげすまれて さらに「明治44年（1911）青鞥社の婦人解放運動を起こした」という記述も不正確だ。この年9月に創刊された『青鞥』は、女性のみの手になることを謳い文句にしていたとはいえ、あくまで「文芸雑誌」の埒を超えないものであって、「婦人解放運動を起こした」わけではない。「解放運動」の性質を帯びるのは翌1912年以降のことで、「文芸」から女権運動・フェミニズムへと青鞥社はたしかに重心移動してゆくのだが、同人らをそこへ駆り立てた大きな要因として、彼女らを「新しい女」と嘲笑したジャーナリズムと旧弊勢力があった。むしろこの嘲罵こそが「婦人解放運動」を生んだとさえいえるのであって、その実情は、『青鞥』の主宰者平塚らいてう（本名明。「雷鳥」とも書かれるが、自らそう署名した例はない）の自伝『元始、女性は太陽であった』全四巻（大月書店、1971～73）に詳しい。

メディアが投げつけた侮蔑語をあえて引き受ける形となった次第だが、その発端は『読売新聞』が1912年5月から社会面に連載した「新しい女」の特集記事で、ここでは、女性の性欲に直截に切り込んだ衝撃的な小説を寄稿した田村俊子、表紙をデザインした長沼（のち高村）智恵子ら、青鞥社に集った十数人が続々と紹介された。続いて名を上げた尾竹紅吉（本名一枝、のち富本、尾竹越堂の長女、竹坡の姪）は、らいてうへの憧れを胸に大阪から上京した人で、7月に入って日本橋のカフェでの飲酒や、らいてうらとの吉原遊郭見学などの奔放な行動を『青鞥』の「編集後記」に書いたことが新聞メディアの好餌となる。「新しい女、五色の酒を飲む」「新しい女、吉原に遊ぶ」のような記事の続出に世間は湧きかつ怒り、らいてうが住んでいた曙町（現・本駒込）の平塚邸は脅迫状や石のつぶてに見舞われた。

そのような次第で、「新しい女」の呼称を引き受けるか否かで社内足並みの

乱れはあったものの、1913年1～2月には『青鞥』が「新しい女、其他婦人問題に就て」と題する「附録」を掲載し、かつ、らいてうは有力雑誌『中央公論』に「私は新しい女である」と題するエッセイ（単行本収録の際「新しい女」と改題）を寄稿することで、流れは定まった。

●坪内逍遙の『所謂新シイ女』ところで、通常は結びつかない「新しい」と「女」の二語を無理に接合したこの新しい日本語は、もちろん『読売』記者による造語ではない。最初の用例は2年前の1910年7月、坪内逍遙が大阪教育会で行った講演「新しい女」とするのが通説で、逍遙はこれを皮切りにヘンリック・イブセン、ヘルマン・ズーダーマン、バーナード・ショーなどによってヨーロッパの戯曲に持ち込まれた新しいタイプのヒロインを論じる連続講演「近世劇に見えたる新しい女」（早稲田講演）を行っていた（これらをまとめた単行本が『所謂新シイ女』、1912年4月刊）。これらのヒロインは『青鞥』誌上でも論じられていたから、彼女らがこの呼称に連結されたのは自然の成り行きでもあったが、一連の論考で逍遙が連発した「新しい女」という新造語は、もちろん英語におけるやはり新しい結合である“New Woman”の直訳である。

●イギリスに発祥した“New Woman” 文学上の“New Woman”の先駆的な例としては、逍遙も第一に採り上げたイブセン『人形の家』（1879）のノラや、ヘンリー・ジェイムズ『ある貴婦人の肖像』（1880～81）のイザベル・アーチャーなどがよくあげられてきた。また1882年に匿名の著者によって刊行された小説『男性の反乱』には、すでにその種の新しい意識に目覚めた女性への強い批判が書き込まれている（ケンブリッジの女性教授いわく「月は女性で、女性はひたすら反射するのみなのです」云々。後に明かされた著者はアンチ・フェミニストとみられたウォルター・ベザント）。とはいえ、実はこれらの作品に“New Woman”あるいはそれに類する語句が出てくるわけではなく、その登場は1890年代をまたねばならなかった。

それが形を取ったのは、既婚女性の悲惨な現実を描く小説を発表していたセララ・グランドと、『フランダースの犬』（1872）で知られるウィーダという二人の女性作家が『ノース・アメリカン・レビュー』誌上で交わした論戦においてである。「女性問題の新局面」と題した評論で、グランドは「家庭こそ女の領域」という既成観念に挑戦する“new woman”の思考が旧弊な男たちに理解されない現状を批判していたのだが、これに噛みついたウィーダが“new woman”を大文字表記して、そのような“New Woman”こそ「人類を脅かす存在だ」と論難したのである。さらにはこの論争に目をつけた『パンチ』誌が得意の戯画で面白おかしく紹介したことで、“New Woman”のイメージは一気に流布することになった（川本静子『「新しい女たち」の世紀末』）。

例えば1897年に世に出て世界的なヒットとなる小説で、ルーマニアへ向かう